
真夜中にラーメン

志内炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中にラーメン

【Nコード】

N3512C

【作者名】

志内炎

【あらすじ】

バイト仲間だった三人の女友達。時は流れて別々の人生を歩む。それぞれの分岐点で友情の持つ意味は……

香奈（前書き）

この小説は完全なフィクションです

香奈

小さな鍋でお湯を沸かす。

生のニンニクをスライスする。

カップラーメンがパッケージされているラップに爪を立てるが、上手く破れてくれない。

「もう」

包丁の先を、カップの底のへこみに突っ込み穴を開ける。

中からかやくとスープの袋を取り出して、麺の上に開け、ニンニクをのせたら、やる事がなくなった。

鍋を見つめて立ったまま、別れ際の麻衣子を思いだしていた。

高いヒールを履いて、改札をくぐり抜ける。崩れない体型に、厭味ないお洒落。

（さすがアパレル）振り返って、見送る私に笑顔で手を振った。向き直ると、携帯電話を耳に当てながら、階段を降りて行った。

「裕美、子供が熱出したって？」麻衣子は待ち合わせの喫茶店に現れるなり、そう言った。

「うん、メール来た」

「大変だよね……あ、私、アイスコーヒー」

私達はもう十年來の友達だ。大学を出て、何とか就職したものの、OLの給料では生活が苦しく、居酒屋でバイトしていた。勤めている会社は違ったけれど、三人とも年齢も境遇も同じで仲良くなった。一年程バイトしていたが、区画整理で店が移転するのを機会に辞めた。

「久しぶりに会いたかったな……」心ない事を口にした。実は裕美が来られなくなった事にほっとしていた。

「そうね……」

麻衣子の視線にドキリとする。麻衣子は昔からどこか鋭いところ

がある。

「まあ、でも子供の病気じゃ仕方ないじゃない」私は笑って頷いた。私は不倫している。

もちろん二人には関係ない、会社の上司だが、それでも、今は裕美に会いたくない。結婚している彼女には、合わせる顔がない気がした。

「仕事どう？」

「まあ何とか」

「やるね、さすが主任」

「麻衣子だつて店長じゃない」

「それでも現場よ？立ち仕事はいい加減辛い」

麻衣子と話すのは楽しい。私達はまだ独身で一人暮らし。部下も出来て、責任は重くなっただけど、やり甲斐も、給料も増えた。

裕美は、三人の中で一番のんびりしていた。私と麻衣子が資格試験に躍起になっている時も

「私はお嫁さんになるからいいの」

といい、二十六の時、本当にさっさと結婚してしまった。

ふわふわのドレスを着て笑う裕美は、どこか愚鈍に見えた。

（自分の力で生きていけないんだね）そう思ったら、なんだか優越感を感じた。

「裕美のどこ、もうすぐ十年だね」

「そうだ……すごいよね」

「本当。危機っぽい事、聞いたことないもんね」

「麻衣子はないの？」

「何が？」

「恋バナ」

麻衣子は秘密主義だ。特に恋愛に関して。それに昔から相談なんてしてきた試しがない。

「すぐ別れちゃうから……会ったび違う男の話してるの、格好悪いでしょ」そう言うてはぐらかす。三人の中で一番モテた。

「香奈はどうよ」やっぱり。

「私は……」

話してしまおうか。迷った。

課長は十歳年上だった。付き合い始めたのは半年前。不倫だが、半年前には既に離婚調停中で、慰謝料で揉め、裁判が長引いていた。もちろん今は秘密の関係だった。ストレスも溜まっている。

「残念ながら」

「本当にい？」

「本当だよ。あ、ねえ、秋からハイウエストが流行るって聞いたんだけど……」

「そうそう。あれはね……」

自分からはぐらかしてしまった。できれば誰かに打ち明けてしまいたいと思っていた。今朝、

『来月にも決着しそうです。そしたら、正式に結婚を前提に付き合いってください。決まったら、改めて申し込むので、考えておいて下さい』というメールが無ければ、麻衣子には話していただろう。

鍋は、かたかたと音をたて始めていた。鍋肌から小さな水泡が表面に向かって立ち上る。まるで透明な藻が生えているようだ。

（どうして結婚を前提にしくちやいけないんだろう）

確かに課長には十分な経済力がある。部下にも慕われている。顔も私好みの薄めの整った顔立ちだし、中肉中背で、白髪まじりの髪は薄くなりそうにはない。誠実で謙虚で優しい……恋人として一分の隙もない。

課長の離婚原因は奥様の浮気だ。だが仕方ないと思う。仕事が佳境に差し掛かると、何日も帰れない事もある。まして部下思いとなると、家庭はかなりしわ寄せをくっていたはずだ。寂しくなって当然だろう。課長には子供はいない。

（子供いなくて仕事してなくて……毎日暇だろうな）

麻衣子とは、仕事の話で盛り上がった。主に使えない部下と、頭

の堅い上司の悪口だった。

「これから飲みにいかない？」

二杯目のコーヒーを飲み終えた時に誘った。麻衣子は腕時計を確かめる。

「ごめん、裕美も来るはずだったから、遅くならないって思ってたんだ」

「仕事？」

「ううん。うちに彼が遊びに来んの」

「そう……なんだ。もう長いの？」

「一年くらいかなあ」

麻衣子は淡々と彼の話をした。通っていたマッサージで知り合い、ナンパされ付き合いだした。バーテンダーで雇われ店長をしている。二つ年上で背はすらりと高いが麻衣子いわく、

「頭のあたりは少し早く歳をとってるみたいで、ちょっと淋しい感じ」らしい。

「秋には彼の実家に行く予定」と結婚を匂わせた。

「裕美の結婚十年のお祝い考えてなきゃね」

喫茶店から駅に向かって歩く道すがら、裕美が結婚した頃の話になった。

「裕美が独身最後の夜遊びんときに、私には仕事に夢も才能もないから奥さんを頑張るって言ってたの、香奈覚えてる？」

「そんな事言ってたっけ？」

「言ってた、言ってた。しめのラーメン屋で。私その時、なんかものすごく優越感に浸ってたんだよね。私は裕美より能力の高い人間だあみたい」

「……」

「今は違う気がする。確かに仕事の能力は私の方が高かったかも知れないけど……裕美の方が、他人を愛する能力は遥かに高かった……」

麻衣子は複雑に顔を歪めていた。私には麻衣子の言っている意味が

よくわからなかった。

（結婚前提じゃなく付き合っていられないかな）

ぐつぐつと沸き上がった湯をカップに注ぐ。蓋がめくれ上がらないように箸を置いて押さえる。隙間から細く立ち上る湯気を眺める。頭の中に天秤が浮かぶ。左側には課長を乗せて、右側には今の生活に乗せていく。

毎日が楽しい。

仕事は充実している。

週末には同僚と飲む。時には朝まで飲む。

休みの日には友達と会ったり、一人でのんびりしたり、英会話に通ったり。

秋には仕事関係の友達と旅行の予定がある。

季節毎にバーゲンに行くようにしている。

妊娠は怖い。

子供は嫌い。

（真夜中にカップラーメン食べるのもきつとナシだね）

裕美ののんびりした顔がちらついて、罪悪感が加算される。天秤は音を立てて右側に傾き、皿の底が地面を叩いた。

「やっぱ、別れよう」

押さえていた箸をのけ、紙の蓋を剥ぎ取ると、誰もいない部屋中に、ニンニクの匂いが広まった。

裕美

夜中にやっている映画を見ながらうとうととしていた。玄関で鍵が開く音がする。

「あれ？」旦那の声に気付いて、のろのろと迎えにでた。

「お帰りなさい」

少し上気した顔は申し訳なさそうだ。

「ただいま。お義母さんのところ、行かなかったの？」

「うん。ママ都合悪くなつたみたい」

「そう。泊まるって言つてたから飲んできちゃった」

「みたいね。いい匂いがする」スーツの上着を脱がせる。

（焼鳥屋だな）燻つたような匂いがする。

「じゃあ、居酒屋バイト時代のお友達にも会わなかったの？」

「……うん」

「そう、残念だったね」

「……まあ、独身貴族たちだから、またの機会に」

もう習慣になつてしまった、スーツをハンガーにかける動作をしながら、軽く受け流した。

「ママ、ごめん。やつぱり今日はいいや」

断つたのは私の方だった。午前中は出掛けるつもりだった。昼にはじまるワイドショーを見るまでは。

「ラーメン、食べる？」

「うん。半分でいいや」

子供部屋を覗いている旦那に声をかける。飲んだ後には必ずラーメンを食べる。始めからラーメン屋で飲めばいいものの、必ず家に帰って来てから食べる。だから乾麺の買い置きは欠かさない。

キッチンにたち、大きな鍋に湯を沸かす。野菜を取り出そうと冷蔵庫を開ける。きちんと整頓された内部に我ながら惚れ惚れする。

（貴女たちではこうはいかないでしょう）

香奈と麻衣子の顔を思い浮かべる。

子供達を迎えに行くまでの短い時間、今日二人に会うための洋服も選び終わり、ワイドショーを見ていた。よくある不倫の再現VTR。愛人に正妻が仕返しし、亭主関白を気取っていた旦那とも立場が逆転する、胸のすくようなストーリーだった。

コメンテーターの一人はカリスマ主婦。二児の母親でありながらファッション雑誌のモデルをもこなす。彼女が苦言を呈した。

「内容はいいんですけど……どうして専業主婦って、必ずといっていい程、テレビの前でお煎餅食べながら、お尻を掻くって表現されちゃうんですか？そんな主婦、今どき少ないですよ」

（その通りよ）

VTRに描かれていた主婦は、不思議な形のウエイブがでるパーマをかけていた。大きいけれど垂れ下がった胸。それよりも迫り出していそうなお腹。愛人よりも逞しく、意地が悪そうな顔の表情。「それに、伸びたカットソーと色味のあってないチエックの微妙な長さのスカート、あれも定番ですよ？今どきそんな……」

今日着て行くための洋服を見た。姿見の横にかけてあるそれは薄いブルーのカットソー。赤いタータンチエックのスカート。丈は膝より下、くるぶしからは多少の距離……

（どうしよう）

姿見のところまで行って悩む。これと決めてしまっていたから、他にはもう思いつかない。せめてもう少し膝に近い丈のスカートでもと、黒いフレアスカートに足を通してみる。

（……）

ホックは閉まったがチャックが上まであがらない。前に回しても一度チャレンジする。その姿が映る鏡を見てはつとした。

もともとふくよかな方だった。男性の視線が痛かった胸は元気なく、垂れ下がっていた。無理矢理にスカートに詰め込まれたウエストは赤ん坊の手首のように不自然に括れている。スカートの裾から覗く足には足首が見当たらない。私はホックを外し、母親に電話し

た。

今の生活にまったく不満はない。優しい旦那はそこそこに出世して、安定しているし、浮気の気配もない。子供達も驚く程優秀、とはいかないけれど、病気もせず明るく育っている。姑にもつかず離れず、可愛がられている。

（不満なんてない）ぎゅっと目を閉じて二人の友達を考える。

香奈は、昔は私と似たような体型をしていた。子供を産んでいない体は昔とさほど変わらない。字は昔から綺麗で斜めに書く数字が几帳面そうだった。

（でも本当は違う）

客が帰った後のテーブルを片付ける時、食べ残しがある皿の上に皿を重ねていた。

（それにずるいところがあった）

つまみ食いをしていた事、オーダーを忘れてた時にすぐ社員に甘えるように救いを求めていた事を思い出す。

（恋愛だつてうまくいかなかったらすぐ投げ出してた）

自分が飽きたり、結婚の気配が近付くとやれ、年収が自分より少ないだとか、子供を作るならもう少し体格がいい人でないとか、私には理解できない理由を並べては別れていた。

『ごめん、子供が熱だしちゃって……また誘って』

断りのメールに香奈は、

『わかった〜残念だけでも。お大事にね』とチカチカするほどの絵文字で装飾された返事を送ってきた。

（麻衣子は……もっとずるい）

スレンダーでいつも真っ直ぐな背筋を思い出す。オーダーをとるときに見せる笑顔は少年のように爽やかだった。それでも厨房の前に戻って来ると、嘘のように冷ややかな顔をしている事がしょっちゅうだった。

（割り切りを通り越して二面性があった）

友達面をしておいて、恋の話をしたことがない。アパレルなのに

洋服をすすめた事がない。

同じ断りのメールに、

『了解。報告したい事があつたけど急がないからまたの機会に。お子様、お大事に』と文字だけの返事を寄越した。

（冷たい人なんだわ）

麻衣子の弱みをみた覚えがない。昔からの隙のない雰囲気からメルからでも伝わってしまう。

有り合わせの野菜を刻んだ。一定のリズムが体に響いて小気味よい。旦那がカウンター越しに覗く。

「半分こするの？」

「うん」

「卵も半分こしようか？」

目尻を下げていう。私が頷くと、食器棚から出した小鉢に、不器用に卵を割入れる。

「黄身、割れちゃった……」

「混ぜるんだから平気よ」

たっぷりの野菜を付属のスープの元を絡めて手早く炒め、茹で上がった乾麺にのせる。その上からお湯をかける。食卓に向かい合い、旦那が割ってくれた卵を半分注ぎ入れる。

「この器、居酒屋友達がくれたやつじゃない？」

「……」

「これ、絶対に割れないのよ」

香奈が力をこめて言った。独身最後の夜遊びと称して飲み歩いた。私たちはずいぶん酔っ払っていて、最後のラーメン屋で、お祝いにくれた包みを開けてしまっていた。

「絶対かどつかはわからないけど……この小花の柄は裕美っぽいでしょう」

麻衣子は少し苦笑いしながらも、小さなピンクの花を嬉しそうに眺めていた。

彼の気持ちが見えなくなつて不安だつた時も二人は一緒にいられた。くだらない助言をするわけでもなく、的外れな励ましをするわけでもない。ただつまらないおしゃべりをして、コーヒーを飲んで。結婚してからは回数こそ減つたけど、内容はかわらなかつた。二人がする仕事の話はつまらなかつたし、劣等感も覚えたけれど、私がする子供の話も彼女たちにとってはそれと同じだったんじゃないか。

「伸びるよ」旦那はからかうようにいう。

「……少ないから、大丈夫だよ」的外れな返事をする。

「お友達に会いに行つておいで。僕だってラーメンくらい作れるんだから」

にっこりと笑う顔が愛おしい。

（私は幸せだ……）

喉の奥が痛くて声がでなかつた。

私は旦那に頼いてみせて、もうすっかりはげてしまった小花があった場所を見つめた。

麻衣子

キッチンのあかりだけつけて、スーパーの袋を作業台に置き、スーツの袖を捲って手を洗う。取っ手の取れる鍋に大量の浄水を流しこむ。

「よいしょ」コンロにかけて火を点ける。

体中が軋んでいる。ただでさえ仕事で鞭打っているのに、昨日は友達に会うために、見栄をはっていつもより高いヒールを履いてしまった。ストッキングの中、足の裏に貼った冷却シートの端っこが丸まって、少し気持ち悪いけれど、気付かぬ事にして冷蔵庫を開ける。

オリーブとピクルスの瓶詰と中華だしの缶詰を除けて、奥にあるラーメンの生麺を取り出す。

「よかった。賞味期限きれてない……」

買って来たばかりの有頭海老を袋から出して眺める。二十四時間のスーパーで目が合って一目惚れして衝動買いした。

食道楽は昔からだ。家事の中で唯一、料理だけは好きだし、得意だった。お掃除サービスやクリーニングはフルに活用しているけれど、食事だけは自炊の方が多い。

洋服は売るのが仕事だから、深い好奇心は持てない。ギャンブルにも興味はない。酒も強い方だが、居酒屋のバイトで何人もの酔っ払いを見てからは、自ら好んで飲もうとは思わない。旅行も億劫だし、第一そんな友達もいない。

すっかりしているように見られがちだが、実のところ、不器用で不細工な人生だった。大勢に気を遣う事ができない。彼氏ができれば友達との交流は極端に薄くなる。モテない方ではないから、男がない時期の方が少ない。基本的に友達は少なくなる。

（おいしそうに食べてたな）

昨日の彼の顔を思い出す。立ち仕事で全身にあらわれる凝りをほ

ぐすためのマツサージ店で、客同士として知り合った。何度か顔を合わせていたが、電話番号をきかれた時は正直面食った。

（ナンパなんて……）

それでもちようど彼氏もいなかったし、軽い気持ちでOKした。

「あれ？」

三尾入りだと思っていた海老は、四尾目が後ろに隠れていて、しかも卵をもっている。オレンジとピンクの間の色で光る節だった足に挟み込まれた紫色の粒を眺めた。

彼とは本当に軽い気持ちだった。もとより既に結婚には夢がない。何度か同棲もしてみたが、上手くいかなかった。

「仕事、いつまで続けるの？」

一番恋が醒めるその一言を何度も聞いてきた。その度に私は言葉を飲み込んだ。

仕事をしてる私が好きだって言ったじゃない。忙しいのは始めからわかっていたでしょう？ どうして男って自分は

「仕事と私、どっちが大切？」ってきかせないくせに、女には自分をとれっていうの？ それに私が仕事を辞めても、今の生活を維持出来るの？ 仮に維持出来たとしても私たちは本当に一生一緒にいられるの？ 別れちゃったりしたら私のキャリアはどうなるの？

声にするかわりに一層仕事に打ち込んだ。男が去っていくまで。

彼は違った。長い腕で頭を支えながら、まるでそれが当然のように「産休と育休はどれくらい取れるの？」と聞いた。

「わからないけど結構長く取れるはず」

「そう」

軽く答えて、私を抱きしめると寝言でもいうように言った。

「夏休み、俺の実家に行こうか」

大きな鍋に沸いたお湯をスープの分だけ小鍋に移し、海老の頭をちぎって入れた。四尾目の頭をちぎる。指に卵が絡み付く。

彼に対して今までの男よりも特に深い愛情を持っているわけではない。OKした時の軽さは今もかわらないくらいだ。

（いつかは別れるんだろうな）

静かな予感さえする。それでも……

「子供が欲しい」

別れるかも知れない相手の子供が欲しいなんて、子供にとっては迷惑な話かも知れない。私の家は両親が不仲で、物心ついた時から罵声の飛び交う中で育った。その環境の方がよっぽどひどい事を知っている。子供がいたとしても、別れる事自体には躊躇はない。

一度妊娠した事がある。

妊娠に気付く前に流産した。気付いていたとしても産む選択はしなかったと思う。仕事が面白くて仕方なかった。その過酷な労働が命を奪った事を、当時の男は無言で責め続け、離れて行った。

子供が産まれなかった事で気持ちちが離れるなら、逆もあるかも知れない。だから静かな予感も変わるかも知れない。

（結局私は私の子供が欲しいのね）

白髪ねぎを作り終えて鍋の中で縮んで踊る、黒い粒を眺めた。

（他人を、愛せないのかも知れない……）

そんなふうにしていつから恋愛に冷静だったかと思い返す。初めて付き合った彼氏とも冷静だった。それどころか、小学生の頃の淡い初恋ですら、恋をしている自分が好きだったただけな気がしてならない。

ちよつとぞつとして、首を振る。

（その点では香奈も同類か……）

香奈は惚れっぽい。特にステイタスのある男が好きだ。職場での恋愛の話も、実は自分を引き上げてくれる相手が多い。だが本人はそんなことには気付いていない。

（そこが可愛いんだよね……って事は私よりよっぽど純粋だな）

今はワケアリの恋愛でもしているんだろう。昨日会った時、

「恋バナないの？」とふってきた。香奈がそういう時は実は自分の話をしたい時だ。そしてはぐらかす時は、たいていワケアリか、別れたい時だ。

「変わらないなあ」

もつと変わらないのは裕美だ。彼女は一貫して愛に生きている。結婚して、子供を産んで……妻になり、母になったのに、ともすれば愚鈍にさえみえる可憐さというか、かわいらしさを失っていないなにもかもが計画通りにすすんだ平凡で、最も難しい成功者の余裕を昔から携えていた。

私は……

「変わったな……」

顔かたちは一番変化がないはずだ。若い後輩たちに負けるのが嫌で、執念のように体型の維持に努めている。肌の手入れもぬかりない。

でも時々、こうして真夜中にラーメンを食べてしまうようになった。半透明になった麺に生のまま海老をのせて、海老みそを加えたスープをかける。白髪ねぎの上から熱した胡麻油をかけただけのシンプルなもの。

そしてそれを一人で食べている事が寂しいと思うようになった。産む選択をしなかったであろう子供が、もし産まれていたら、どんな生活をしていたのだろうと想像するようになった。

そしてそんな自分の気持ちを女友達に相談してみたくなくなった。

気弱になってしまった私を彼女たちはどう思うのか。絶対に話そう。ありのままを話そう。私がどれだけだめで、どれくらいずくて汚い人間なのか。今まで言えずにいたすべてを。

きつと少し驚く。裕美は怒るかも知れない。香奈も怒るかな？それでも受け入れてくれるに違いない。そして何事もなかったようにつまらないおしゃべりが始まるに違いない。

キッチンのあかりだけの暗い部屋で食べた海老味のラーメンは裕美が独身最後の夜遊びの時に食べたラーメンの味に少し似ていた。それよりも少しだけさっぱりしていて、少しだけ、しょっぱかった。

麻衣子（後書き）

時に鬱陶しくもあり、時にブレイキにもなり……詰まっからわかる鼻の存在のありがたみのように、当然そこにあるもの。夜中に力ツプラーメンを作りながら構想を練りましたが、筆者は麻衣子に近いです。読者の皆様は誰に共感を覚えますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512c/>

真夜中にラーメン

2010年10月8日15時45分発行